

## 2019年度人権ゆかりゼミ 8月14日レジメ

「都名所図巻」中巻続き 図版は31紙目から配布する。

前回の読み残し分

### 29 紙

吉田山の東側から南にかけての地を描く。

(上段)

くろたにはかはら (黒谷墓原)

金戒光明寺のあるあたりは古くからの墓地であった。

くろたにほんどう (黒谷本堂)

金戒光明寺の付近を黒谷と呼んだため、寺自身をも異黒谷の名で通称する。図はその本堂。比叡山黒谷に居た法然上人が、この地に念仏道場を開いたのに始まると伝え、初めは新黒谷と称された。

しゝがたに (鹿ヶ谷)

如意ヶ嶽の西麓に広がる地で、西は白川を隔てて神楽岡。図中に流れる川は白川である。

びくくの御所 (比丘尼の御所)

後水尾院が皇女多利宮のために承応三年(1654)に創建した尼寺で靈鑑寺という。溪流に沿う寺院であったため、谷御所とも呼ばれた。当時は建立して間もない時期である。

(下段)

じやうどじむら (浄土寺村)

鹿ヶ谷の北側にある村で、高燥な豊かな村といわれる。

ぎんかく寺 (銀閣寺)

足利義政が建てた山荘東山殿を、死後に寺に改め慈照寺と号した。北山の金閣(鹿苑寺)に対し、境内の観音殿を銀閣の名で呼ぶ。

にやくわうし (若王子)

鹿ヶ谷にある神社で、平安時代後期に熊野那智権現を勧請したのにはじまる。永観堂の鎮守とされた。江戸時代は聖護院門跡の院家。

### 30 紙

さらに場面は南を辿る。

(上段)

おかざき 付まつり (岡崎 付祭り)

吉田村の南に位置する岡崎村の鎮守東天王社（現岡崎神社）とその祭礼を描く。その祭礼は旧暦九月一六日で、劍鉾が7本出された。その内の一本は大鷹鉾とよばれて、室町時代より著名であった。

#### 京ごくりんじやしき（京極臨時屋敷）

河原町六角の東側にあった高松藩京極家の屋敷が、承応三年五月に炎上したため、その臨時屋敷が岡崎村にあったようである。

#### やうくわんどう（永観堂）

南禅寺の北に位置する浄土宗の寺院で、禅林寺と号す。本尊の阿弥陀如来は、振り返る姿であることから、見返り阿弥陀と呼ばれる。

#### なんぜんじ（南禅寺）

東海道が東山に掛かる地に北に位置する臨済宗の寺院。応仁の乱で焼失した堂舎を、江戸時代初頭に再興して今日に至る。図に描かれた仏殿は明治二八年に焼失した。

（下段）

#### しんめい（神明）

粟田山の支峰大日山麓、東海道に面して鎮座する。現在の日向神社のこと。日向神社の名は、式内社に当てて明治期に命名したもので、古くは朝日宮とか粟田神明宮などと呼ばれた。

#### やすいもんぜき（安井門跡）

一般に安井門跡といえば八坂神社に近い現東大路通り沿いの旧跡をいう。なぜここに記されるかが分からない。当時、永観堂の北に東福門院が建立した光雲寺の誤記であるかもしれない。

#### こまかたき 付ぎぜんせき（駒ヶ瀧 付座禅石）

南禅寺の背後、東山山中にある滝で、白川の源流。高さ九メートル程で、左右に巨岩が聳え立つ。最勝光院の住持狛僧正が座禅を組んだといわれる。

### 31 紙

東海道が東山を越える周辺部を描く。

（上段）

#### おさるどう（お猿堂）

青蓮院の西にあった天台宗金蔵寺の境内の庚申堂。三猿堂とも呼ばれ、室町時代から庶民の信仰を集めた。『上杉本洛中洛外図屏風』にも「見さるきかさる」の記載がある。金蔵寺も享保頃には本堂を改築して本尊の地藏尊が「米地藏」の名で親しまれたが、

維新で廃絶。お猿堂も近くの尊勝院に移された。

#### しやうれん院殿御屋しき（青蓮院殿御屋敷）

天台三門跡の一つで、三条白川の南高台に大きな寺地を有した。江戸時代は一般には内部が公開されず、地誌などにも寺観を描いたものは少ない。

#### しらかわはし（白川橋）

東海道が白川を渡る所に架かっていた橋。幕府が管理した公儀橋で、寛文九年には石橋となった。

（下段）

#### ひでんじむら（日伝寺村）

中世以来の安居院非田院から、寛永年間（1624～44）に非人が移されて成立した村。この地を描く絵画資料は珍しい。

#### あまべ（天部）

中世に四条東京極大路の南側にあった河原の集落であったが、秀吉のお土居構築政策により、三条橋東側の地に替地を与えられ移住した。禁裏や二条城の掃除役などを担当した。年の瀬に京都の街に、羊歯の葉の付いた笠をかぶり覆面をして現れる「節季候」も、この地から出ており、その姿が描かれている。

#### とうさんぢょうのもり（東三条の森）

鴨川の東 八大天王社の祭礼には、鉾がこの森まで来た。鶴の森ともいう。

### 32 紙

知恩院を中心に、その付近を描く。

（上段）

#### ちをんゐん（知恩院）

東山の華頂山麓に広大な寺地を有した浄土宗の本山。徳川氏は代々浄土宗であったため、江戸時代は優遇され、宮門跡を迎えて発展。寛永一〇年（1633）には多くの建物が炎上するが、直ちに復興された。

#### いつしんゐんとう（一心院塔）

知恩院の勢至堂や法然廟の南に位置する独立した浄土宗の寺院であるが、知恩院との関わりが深く、宮門跡の墓所ともされた。

（下段）

#### さんもん（山門）

知恩院の山門で、徳川秀忠が元和五年（1619）に建立した五間三戸二階二重門の壮大な建造物。寛永の火災には焼失を免れ

ている。

#### せいしどう（勢至堂）

法然廟に接して位置し、寛永の火災を免れた。享禄三年（1530）の建立で、江戸時代に知恩院が寺勢を拡大する以前の建造物である。

### 33 紙

場面は東山山麓から京都の西に移る。

（上段）

#### あたご（愛宕）

丹波国との境界をなす山。頂上近くにある愛宕権現は、白雲寺とも呼ばれ、修験者による神仏習合の神社とされた。本尊は將軍地藏尊で火伏せの神として多くの信仰を集めた。図は寛政一〇年の大火で焼ける以前の姿を描く。

#### 月のわ（月の輪）

愛宕山東側の大鷲峰山腹にある天台宗の寺院。平安時代末期の貴族九条兼実が閑居したことで知られる。

#### たかお（高雄）

高尾とも記し、榎尾・梅尾とともに紅葉の名勝として知られる。山腹には和気清麻呂により建立された神護寺がある。

（下段）

#### まきのお（榎尾）

高尾・梅尾とともに三尾と呼ばれ紅葉の名勝。山の麓を清滝川が流れ、その北岸に西明寺がある。図は東福門院の寄進によって新築なった堂宇であろう。

#### なるたき（鳴滝）

鳴滝川の谷に沿って広がる名勝。図に描かれた寺院は白砂山中腹に寛永六年に建立された日蓮宗の三宝寺。

#### とがのお（梅尾）

三尾の最北に位置し、清滝川の清流に紅葉が美しいことで知られる。図はその北東岸にある高山寺を描くが。この寺は鎌倉時代初期の僧妙恵によって再興されたもの。石水院は当時の建物で、後鳥羽上皇の賀茂別院を移築したもの。

### 34 紙

京都盆地の北西、嵯峨野から宇多野にいたる一帯を描く。

（上段）

#### 五たいほとけ（五体仏）

鳴滝の音戸山山頂に、木食上人が彫刻した丈六の五智如来石像。寛永一八年（1641）に再興された蓮華寺の境内仏であったが、火災に掛かって荒廃。山頂の石仏だけが知られていた。現在は山頂から境内に遷されている。

#### だいかくじどの御やしき（大覚寺殿御屋敷）

嵯峨天皇の離宮を、死後に寺院とした真言宗の寺院。南北朝期には南朝方の上皇や皇子が住持をしたこともあり、嵯峨御所とも呼ばれる。本堂にあたる客殿は、桃山時代の書院造り建築。

#### おふさわ（大沢）

大覚寺の境内の東に広がる池。舟遊式の庭園で、桜や紅葉や明月の鑑賞地として知られる一方、池の水は付近の伝は他への灌漑用水として配られた。図でもその水門が描かれる。

（下段）

#### ひろさわ 付月見（広沢 付月見）

大覚寺の東方、宇多野に至る途中にあり、観月の地として知られる。図でもまさに月見の真っ最中である。

#### おむろ（御室）

双岡の北側に広がる一帯、仁和寺の別名でもある。宇多法皇が仁和寺内に営んだ御座所（御室）からの名称でもある。

#### 仁和寺殿（仁和寺殿）

仁和二年（886）に孝光天皇の勅願によって建てられた真言宗の寺院。天皇家の信仰篤く、門跡寺院の筆頭とされる。背の低い遅咲きの桜でも知られる。寛永一四年（1637）に徳川家光が建立した五重塔があるが、図では多宝塔を描く。

#### りやうあんし（竜安寺）

平安時代の御願寺である円融寺の地に、室町時代細川勝元が建てた臨済宗の寺院。方丈の白砂と石の庭が有名である。

### 35 紙

宇多野からその北東部、西賀茂に一帯を描く。

（上段）

#### とうじみん（等持院）

衣笠山山麓にある臨済宗の寺院。古くは仁和寺の塔頭であったが、足利尊氏によって禅宗に転宗した。以後足利将軍家の菩提寺とされた。

#### みやうしんじ（妙心寺）

双岡の東にあり、臨済宗の大本山の一つ。南北朝の初期に、花

園上皇の離宮を寺院に改めて開山した。政治に巻き込まれて浮沈が甚だしかったが、江戸時代には多くの諸大名の菩提寺を塔頭として発展した。

#### たかゝみね（鷹ヶ峯）

徳川家康より、大文字山北側の地を与えられた本阿弥光悦が、元和元年に拓いた集落。日蓮宗を信仰する芸術家が居を構え作品を生み出した。中心に光悦寺がある。

（下段）

#### ひらの（平野）

衣笠山東麓一帯に広がる村であるが、中心は平安時代以来の古社平野神社である。図に描かれる社殿は寛永年間に西洞院時慶が建立したもので、比翼春日造と呼ばれる。

#### にしかも 付まん中のさか（西賀茂 付真中の坂）

平野から大きく北に移動して、上賀茂神社の賀茂川を挟んで西側に広がる西賀茂を描く。図にいう「真中の坂」とは、杉坂を経て丹波に抜ける長坂のことである。

### 36 紙

西賀茂村の南東に広がる一帯を描く。

（上段）

#### ふなをかやま（船岡山）

京都盆地の中央北にあり、平安京建設ではその基準点ともされた。山麓では緋毛氈を敷いて酒宴が開かれている。

#### かみかも 付けいば（上賀茂 付競馬）

京都盆地の鎮守社でもある上賀茂神社を描くが、社殿の様子は実際と合わない。五月五日に行われた競馬を大きく描く。

（下段）

#### 大とくじ（大徳寺）

船岡山の北側に位置する臨済宗の大本山の一つ。大燈国師の開山によるが、花園天皇・後醍醐天皇の帰依を受け勅願寺となったが、室町時代は冷遇された。信長の葬儀が行われるにいたり、江戸時代は大名の菩提寺を多く塔頭に抱え、寛文年間には最盛期を迎えていた。

#### おふみや（大宮）

船岡山周辺から北側に広がる地域。大徳寺や今宮神社など、多くの社寺を有する。

#### いまみやおやま（今宮おやま）

大徳寺の西北に鎮座する。この付近は紫野と呼ばれ、疫病流行時には御霊会が行われた。近世には付近一帯の鎮守社とされ、桜花の名所でもあり、花の満開の三月一〇日には、やすらい祭りが行われた。

## 37 紙

京都盆地の北山中一帯を描く。

(上段)

### いわや (岩屋)

雲ヶ畑の西北、栈敷ヶ嶽の西南山中にある志明院をいう。岩屋不動とも称され、修験の修行場でもあった。桜の名所でもある。本堂北側の神降窟には香水が湧き、薬水として多くの巡拝者が訪れた。

### いわやのたき (岩屋の瀧)

本堂のさらに奥にある瀧で、飛龍の瀧とも呼ばれる。この瀧ノ背後の断崖にある洞窟で、弘法大師が護摩法を修したと伝える。この洞窟は歌舞伎「鳴神」の舞台でもある。この話はこの瀧が賀茂川の源流とされることによる。

### きふね (貴船)

同じ北山山中ではあるが、山を隔てて東側の貴船川上流に祀られる貴船神社。賀茂川の水源地の一つで、平安京の祈雨止雨を司る神として崇敬された。

(下段)

### くらま (鞍馬)

貴船社を祀る谷のさらに東の谷、鞍馬川上流の鞍馬山南麓に建立された寺院で、本尊は毘沙門天。平安京の鬼門の守護神とされたが、室町時代以降は商売繁盛の神とされ、京都町衆の信仰が盛んとなった。

### ふごおろし (畚降ろし)

鞍馬持参詣の土産は、山で採取された火打ち石に人気があったが、その販売方法として採取したばかりの石を畚籠に入れて直接参詣道に運んだ。この光景が鞍馬名物となり、地藏盆の景品を二階から渡す時などに畚降ろしが再現され、子供たちを喜ばせた。

### そうじやうがたに (僧正ヶ谷)

鞍馬寺奥の院不動堂から貴船に至る山中にある溪谷。修験者の修行の場で、牛若丸が鞍馬の天狗より兵法を習ったという伝説で著名。義経堂がある。

## 38 紙

鞍馬から南に下って、京都盆地最北端の地一帯を描く。



(上段)

**みぞろいけ** (深泥ヶ池)

上賀茂村の東、鞍馬に至る街道沿いにある池。

**いちはら** (市原)

鞍馬川と静原川が合流する付近、鞍馬から大原に至る街道に沿って拓けた地である。山間部から都市部に荷物を運ぶ人々の姿が見える。

**はたえだ** (幡枝)

深泥池の北、鞍馬への街道沿いの村。土器師の村として知られる。図はその土器を振売りする者の姿か。

(下段)

**いわくら** (岩倉)

高野川の上流岩倉川がつくる小盆地の集落。天台宗実相院や大雲寺、石座神社などがある。

**なかたに** (長谷)

岩倉盆地の北東部部を占める小村。

**しらかわ** (白川)

長谷村から大きく南に下り、東山の如意嶽西麓の白河村を描く。白川村は近江坂本に至る山中越えの入口にあたり、交通の要衝とされた。

**しやうかう院殿** (照光院殿)

聖護院門主の隠居所。

**39 紙**

高野川沿いの村々を比叡山まで描く。

(上段)

**たかの** (高野)

高野川の東に沿う地で、後水尾院が修学院離宮へ赴くための道沿いということで寛文一一年頃に開拓されたというから、この図が描かれた頃は若干の集落があったに過ぎないようである。

**おはら** (大原)

高野川の上流にある盆地に立地する。川沿いに若狭街道が北上する。比叡山の影響下に多くの念仏道場が建立された。村人は薪炭・柴などを都に売りに行き、生計を立てた。柴を売る大原女はよく知られる。

**しやうこのあみだ** (証拠の阿弥陀)

大原にある天台宗の寺院勝林寺。その本尊を俗に証拠の阿弥陀と

いう。

(下段)

**やせ** 付かまふろ (八瀬 付竈風呂)

大原から高野川を下った次の集落で、高野川の支流八瀬川に沿って集落を形成する。竈風呂で知られるが、この風呂は蒸風呂で、江戸時代中期頃までは、洛中からも盛んに入りに入った。竈風呂の図様はあまり残っておらず本図は珍しい。

**ゑいざん** (叡山)

八瀬は比叡山への登山口でもあり、八瀬童子は比叡山へ登る貴人の輿を担いだ。図はその比叡山への道と、比叡山の中心根本中堂付近の景観を描く。

#### 40 紙

近江坂本を描き、再び雲母坂を越えて京都に戻る。

(上段)

**さかもと** (坂本)

比叡山の里坊として栄えた坂本の町を描く。

**さいきやうじ** (西教寺)

比叡山の東麓に位置する天台真盛宗の本山。

**さんわう** (山王)

比叡山延暦寺の鎮守社として栄えた日吉大社のことで、日吉山王とも呼ばれる。この神社の四月の祭礼は、7基の神輿渡御が中心で、各社から降ろされた神輿が、琵琶湖を船渡御することで知られる。

**みこしふね** (神輿船)

その船渡御の様子を描く。

(下段)

**きらゝさか** (雲母坂)

比叡山根本中堂から音羽川沿いに京都に至る道で、険阻であったが京都比叡山を結ぶ最短距離の道として知られた。

**いしふどう** (石不動)

雲母坂の登り口付近にあった雲母寺。本尊が石の不動尊であったが、現在はすででない。

**しゆかくじ** 付御ちゃ屋 (修学寺 付御茶屋)

雲母坂の登り口付近に、後水尾上皇によって、万治五年頃に建立された山荘、修学院離宮のことと考えられる。上中下の三軒の茶屋からなる。